

Urban Nature Kitakyushu



北九州市生物多様性戦略 2025-2030

令和7年3月
[パブリックコメント版の修正案] 北九州市環境審議会事務局



Contents

第1章 北九州市の生物多様性

北九州市の生物多様性の特徴と魅力
北九州市の食の魅力
北九州市の多様な生きもの

第2章 生物多様性をめぐる 国内外の動向

生物多様性とは
生物多様性の損失
生物多様性を取り巻く国内外の動向

第3章 北九州市のこれまでの取組

北九州市の自然の歴史と公害克服の経験
第2次戦略での主要な取組と成果
今後取り組むべきこと

第4章 北九州市生物多様性戦略 2025-2030の基本的事項

戦略の基本方針と目指す姿
戦略の基本的枠組みと位置づけ
戦略の基本目標と基本施策
戦略の推進体制

第5章 主要施策一覧

基本目標1に関連する主要施策
基本目標2に関連する主要施策
基本目標3に関連する主要施策

Urban Nature Kitakyushu

第1章 北九州市の生物多様性

工業を主体として産業都市として成長し、九州を代表する大都市として発展を遂げてきた北九州は、先人が守り育ててくれた、都市に近接する豊かで面白い生き物や自然、いわば**アーバンネイチャー**にあふれる街です。



A 若松北海岸
若松区北部につらなる海岸で玄海国立公園に属する景勝地。遠見ヶ鼻や千疊敷といった荒波で浸食された独特の地形が見られる。



C 北九州市響灘ビオトープ
廃棄物処分場の埋立地に雨水がたまり、湿地や草地等多様な環境ができ、そこに希少種を含む多くの生物が生息するようになった奇跡の場所。環境省の重要湿地に指定されている。



B 響灘緑地グリーンパーク
若松区の頼田貯水池を中心に山林や草原等の様々な自然環境がひろがる市内最大の公園。花や緑、イベントやキャンプ等、レクリエーションが楽しめる。



D 血倉山
北九州市を代表する標高622mの山。北九州国立公園の一部。野鳥や昆虫等、市街地のすぐ近くで、たくさんの動植物等が生息している。



E 合馬の竹林
小倉南区の合馬は、土壌改良や、一年中手間をかけた竹林管理がなされており、良質で美味しいたけのこが獲れる産地である。



F ほたる
北九州市では、ホタルの保護や水辺の保全といった地域活動が盛ん。まちなかの河川でもたくさんのホタルの飛翔が見られる。市内にはホタルをはじめとした水辺の生き物などを展示する2か所のほたる館が設置されている。

| Feature01 |

3つの海

響灘・関門海峡・周防灘

| Feature02 |

3つの国立・国定公園

瀬戸内海国立公園・北九州国立公園・玄海国立公園

| Feature03 |

市域面積の約4割が森林

| Feature04 |

渡り鳥の十字路

日本列島を縦断 × 日本一大陸間を横断

| Feature05 |

希少な生物の宝庫

平尾台・曾根干潟・響灘ビオトープ



G 平尾台
3億4千万年の赤道近くの海の海洋生物(サンゴ、フズリナ)の死骸が石灰岩になったものであり、羊群原が特徴。日本三大カルストの一つ。北九州国立公園、一部、国の天然記念物に指定。



H 関門海峡
九州と本州を隔てる約28kmの海峡。海上交通の要所であり、壇ノ浦の合戦等歴史の舞台にもなった。瀬戸内海国立公園に属する。



I 水環境館
小倉北区の中心市街地を流れる紫川にあり、川・自然・環境について、楽しく学べる施設。川の中を横から見られる巨大な観察窓が特徴。



K 山田緑地
小倉北区西部に位置する約140haの広域公園。戦時中は軍事施設であったため開発を免れ、広葉樹の自然植生が残る貴重な場所。



J 曾根干潟
環境省の重要湿地であり、面積517haの広大な砂泥干潟。日本最大級のカブトガニの産卵地で渡り鳥の飛来地としても有名。昔から好漁場で現在もカキ養殖等が盛ん。



ハチクマ／ヒヨドリ

北九州市は、国内を縦断する渡り鳥のルートと、中国や朝鮮半島などの大陸間を横断する渡り鳥のルートが交差する「渡り鳥の十字路」に位置しており、渡り鳥の時期には多くの渡り鳥を観察することができる。



Urban Nature Kitakyushu

寿司をはじめとした世界に誇る北九州市の食も、豊かな自然の恵みです。地元食材の「地産地消」を推進することは、多くの生きものが棲む海、川、山、農地などの生物多様性の保全に貢献することに加え、農林水産業の振興や地球温暖化対策にもつながるなど、たくさんのメリットがあります。



北九州市では、2024年8月に設立された「すしの都 北九州協議会」と連携し、北九州のすし文化を広く発信していくとともに、国内外からの交流人口の拡大につなげ、「すしの都」の実現と、都市の魅力向上を目指しています。また、総務省の統計によると、「刺身盛合わせ」の消費金額(2人以上世帯における都道府県庁所在市及び政令指定都市のランキング)で北九州市が1位となるなど、広く市民に魚食文化が根付いています。

美味しい鮓をにぎるためには大事なことが3つあります。

1 「魚のクオリティ」

魚が美味しく育つには、暖流と寒流の交わる場所「潮目」が必須です。大規模な潮目は世界で3つの地域にしか存在せず、その内の1つである日本近海には、北九州界隈と三陸沖の2か所に点在しています。



すしの都
北九州協議会 会員 船橋氏

2 「鮮度」

鮮度が良いうちにすしネタに調理することが非常に重要です。市場には「産地市場」と「消費地市場」の2種類があり、両者には「鮮度タイムラグ」があります。北九州市は全国でも稀に見る「都市型産地市場」であり、水揚げされたての魚を鮮度抜群の状態に鮮魚屋が手にする事が出来ます。

3 「豊富な魚種」

海洋生物の大多数は浅い海「大陸棚」に生息しています。北九州市は響灘、周防灘、関門海峡と3つの海に囲まれています。いずれも大陸棚となり、豊富な魚種と漁獲量に恵まれています。大陸棚と潮目、魚の鮮度、この3つの条件が揃っている都市は世界でも北九州以外にはなく、まさに「すしのローカルガストロノミー^(※)」に最も相応しい街と言えます。

※ローカルガストロノミー：その土地の気候風土・伝統文化を料理に表現すること

Nature's Gifts

北九州市の食を支える豊かな自然の恵み



豊前海一粒かき(マガキ)

豊前海の豊富な栄養で育まれたカキ。この中から厳格な衛生基準をクリアしたもの。冬が旬。



豊前本ガニ(ガザミ)

豊前海で漁獲されるガザミの中でも特に身入りの良いもの。秋頃が特に美味。



関門海峡たこ(マダコ)

関門海峡の激しい潮流のため足が太く短く、吸盤が足先まであるのが特徴。歯ごたえがよく旨い。



合馬たけのこ

小倉南区「合馬」で収穫される。旬料理の本場・京都、大阪の一流料亭で指名されるほどの名品。



若松潮風®キャベツ

若松区を代表する農産物。ミネラルを含む玄界灘の潮風をあびて育った甘くおいしいキャベツ。



若松潮風®プレミアム

甘さとみずみずしさ、シャリ感を保つために土づくりにこだわった、糖度の高い大玉すいか。



若松水切りトマト

与える水を制限する栽培方法により、甘みが濃縮され、果物並みの糖度と旨み特徴のトマト。



大葉しゅんぎく

北九州市では古くから親しまれている野菜。葉先が丸くギザギザの切れ込みがない品種。



小倉牛

北九州市内で丹念に育てられた絶品の黒毛和牛。料理人から絶大な信頼を得る一級品。



一本槍(ケンサキイカ)

福岡で夏のイカといえば本種。身が柔らかくて味が良い。漁期:5月~8月



藍の鮓(サワラ)

全長1mを超える大型魚。冬~春は「寒サワラ」と呼ばれ、特に味が良い。



アカモク

藻場を形成するホンダワラ類の一種。強い粘りと歯ごたえのある食感が特徴。



身近なところにある様々な自然に、個性豊かな多様な生きものが生息しています。

ここでは、そんな魅力的な「市民」の仲間の一部をご紹介します。



ミサゴ

(環境省 準絶滅危惧)
・主食が魚の白いタカ。上空から豪快に水面へダイブし魚をとらえる
・白鳥等で繁殖



トビハゼ

(環境省 準絶滅危惧、福岡県 絶滅危惧II類)
・干潟上を飛び跳ねるハゼ
・市内では曾根干潟等、瀬戸内海側の河口や干潟に多い



シオマネキ

(環境省 準絶滅危惧II類、福岡県 絶滅危惧II類)
・雄が片方の巨大なハサミを振って雌を誘う行動が「潮まねき」の由来
・内湾、河口域の泥干潟に生息



クロツラヘラサギ

(環境省 絶滅危惧II類、福岡県 準絶滅危惧)
・ヘラ状の長いウチバシが特徴。「サギ」ではなくトキの仲間
・主に冬鳥だが、曾根干潟周辺では渡らない個体が周年みられる



ヘナタリ

(環境省 準絶滅危惧、福岡県 準絶滅危惧)
・内湾の砂泥底に生息する3cmほどの細長い巻貝
・曾根干潟では、今でも多数生息



ハクセンシオマネキ

(環境省 準絶滅危惧II類、福岡県 準絶滅危惧II類)
・雄のハサミは片方が巨大で白い
・曾根干潟では大野川河口の砂洲や海床路周辺でみられる



ツクシガモ

(環境省 絶滅危惧II類、福岡県 準絶滅危惧)
・冬に筑紫地方でよくみられる大型のカモ
・曾根干潟は本種の代表的な越冬地



イチョウシタリ

(環境省 絶滅危惧II類、福岡県 準絶滅危惧II類)
・内湾奥の泥干潟に生息するまっ白な二枚貝
・県内では曾根干潟、今津干潟で確認



ミドリシャミセンガイ

(福岡県 準絶滅危惧)
・緑色の殻をもつが、二枚貝ではなく腕足動物
・古代から形が変わらない「生き化石」
・有明海では食用



コアマモ

(福岡県 情報不足)
・多年生の海草類
・内湾や河口域の浅い砂泥底に生息し、アマモ場を形成



ズグロカモメ

(環境省 絶滅危惧II類、福岡県 絶滅危惧II類)
・夏羽は頭が真っ黒になるので「ズグロカモメ」
・毎年200〜300羽が曾根干潟で越冬
・ギラヴァンツ北九州のマスコットキャラクター「ギラン」のモデル



ダイシャクシギ

(福岡県 絶滅危惧II類)
・細長いウチバシを持つ大型のシギ
・曾根干潟で越冬する代表的な冬鳥



ハマボウ

(福岡県 絶滅危惧II類)
・市内では若松や周防灘の河口、海岸にみられる
・玄海国立公園の指定植物



イチイガシ

・常緑高木、独特の形と風格があり姿が美しい
・北九州市のシンボルツリー



カワセミ

・水辺に生息する青が鮮やかな小鳥
・素早いダイブで魚を捕らえる
・1960〜1970年代の市内では幻の鳥といわれるほど減少
・現在では数は多くないが市内の水辺各所でみられる



ルリモンハナバチ

・体色は黒で青緑色の斑紋が美しい「幸せを呼ぶ青い蜂」と言われている
・市内では、山田緑地、県立中央公園等でみられる



チュウヒ

(環境省 絶滅危惧II類、福岡県 絶滅危惧II類)
・広いヨシ原に生息するタカ
・国内での繁殖は局地的だが、北九州では若松等で確認
・国産車の「ハリアー」は英語で「チュウヒのなかま」



カヤネズミ

(福岡県 絶滅危惧II類)
・日本最小のネズミ
・ススキ等イネ科植物が繁茂した草地に生息
・葉で丸く隠れた巣(球巣)を作る



ガシャモク

(環境省 絶滅危惧II類、福岡県 絶滅危惧II類)
・「蔭」ではなく流水性の多年草
・国内の自生地は北九州市、つがる市、鳥取市の3か所のみ



オシドリ

(環境省 情報不足、福岡県 準絶滅危惧)
・カモのなかま、雄の冬羽は鮮やかな橙赤色
・市内では小倉南区の道原貯水池、昭和池等でみられる



アサギマダラ

・長距離移動する「渡り蝶」
・市内では、白野江植物公園、山田緑地、若松北海岸等に飛来



トノサマガエル

(環境省 準絶滅危惧II類、福岡県 絶滅危惧II類)
・代表的な水田のカエル
・近年、平地ではほとんどみられなくなった



トバタアヤメ

(福岡県 野生絶滅)
・アヤメの変種で小型
・和名にも字名にも「トバタ」がつく
・野生絶滅、戸畑区内の公園等で大切に育てられている

ベッコウトンボ

(環境省 絶滅危惧II類、福岡県 絶滅危惧II類)
・響灘ピオープのシンボル種、成虫は4〜5月にみられる
・ヨシ、ガマ等が茂る池沼に生息するが国内の生息地は数か所に限定
・種の保存法により採集が禁じられている



カスミサンショウウオ

(環境省 絶滅危惧II類、福岡県 絶滅危惧II類)
・九州の里山を代表する止水性の小型サンショウウオ
・第二種国内希少野生動植物種



ハチクマ

(環境省 準絶滅危惧、福岡県 準絶滅危惧)
・「ハチ」を主食とするタカ
・夏鳥で、北九州は春・秋の渡りルート上にある

カブトガニ

(環境省 絶滅危惧II類、福岡県 絶滅危惧II類)
・太古の昔から姿かたちが変わらない「生き化石」
・曾根干潟は国内有数のカブトガニ産卵地



コガタノゲンゴロウ

(環境省 絶滅危惧II類、福岡県 絶滅危惧II類)
・「コガタノ」とあるが、県内最大のゲンゴロウ
・響灘ピオープ等、水生植物の多い止水域等に生息



カゼトゲタナゴ

(環境省 絶滅危惧II類、福岡県 絶滅危惧II類)
・九州北西部にのみ分布する小型のタナゴ
・近年、荒川ではみられなくなった

絶滅のおそれのある種のカテゴリ

野生絶滅	絶滅寸前あるいは自然分布域の外側で野生化した状態でのみ存続している種
絶滅危惧I類	絶滅の危機に瀕している種
絶滅危惧II類	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの
準絶滅危惧	IA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの
情報不足	絶滅の危険が増大している種
準絶滅危惧	現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧II類」に移行する可能性がある種
情報不足	評価するだけの情報が不足している種

北九州市に生息する多様な生きものたち

Flora and Fauna

生物多様性とは

森、里、川、海。様々なところに、様々な生きものが暮らしています。この多彩な自然環境と生きものは、それぞれ相互につながり、長い長い年月を経て、お互いになくてはならない関係が構築されました。この「様々な生きものとそのつながり」のことを「生物多様性」といいます。生物多様性には、「生態系」の多様性、「種」の多様性、「遺伝子」の多様性という3つの多様性があると言われています。



なぜ生物多様性が重要なのか

みんな繋がっている

生物多様性とは、生きものたちの豊かな個性とつながりのことです。地球上には様々な自然の中に、長い歴史の中でそれぞれの環境に適応して進化した多様な生きものが存在しています。これらの生命は一つひとつに個性があり、全て直接に、間接的に支えあって生きています。

価値としての考え

私たちの生活や事業活動は、食糧、水や燃料の供給をはじめ、様々なかたちで生物多様性にもたらす恵みに支えられています。こうした恵みを、「生態系サービス」と呼んでいます。この生態系サービスは、さらに「基盤サービス」、「供給サービス」、「文化的サービス」、「調整サービス」の4つに分類されます。

ひとたび、生物多様性のバランスが崩れると、食料、水、衣服、燃料など生活に必要なものが失われたり、土砂くずれや洪水などの自然災害の発生頻度が高くなったりと、私たちの生活自体が成り立たなくなります。



生物多様性はなぜ重要なのか

例えば私たち人間が生きていくためには、何か食べなくてはなりません。そして私たちの食物は、動物性にしる植物性にしろ、すべて他の生物の体の一部なわけです。また私たち生物は呼吸をし、二酸化炭素を発生させます。この二酸化炭素を環境の循環の中に戻すためには、植物の光合成が必要。植物は、二酸化炭素から酸素を取り除いて排出し、残った炭素から他の生物が利用できる炭水化物を作り出してくれています。そして代謝によって生じるのが排泄物ですが、それを下水処理場で分解し浄化してくれるのは、さまざまな微生物。ちなみに皆さんに贈られているゴミブリの本来の仕事は、森で動物の死骸や落ち葉を分解することです。つまり、1つの生物だけが自立的に生きていくということは不可能で、地球上にいる生物はエネルギーや情報、物質を交換し相互に関わりあっている。それが「生物多様性」が大切な理由です。

【出典:エコジ(環境省)福岡伸一先生インタビュー】

ハチなどの花粉を媒介する生き物の貢献

世界の農作物全体のうち35%は、ハチなどの花粉を媒介する生き物がいないと育たないと言われています。また、それらの農作物の市場価値は、年間2,350億ドル〜5,770億ドルに上ると推計されています。このように、身の回りの小さな虫でさえ、いなくなってしまうと私たちの生活に大きな影響が生じることになります。

今、ものすごいスピードで生物多様性が失われている

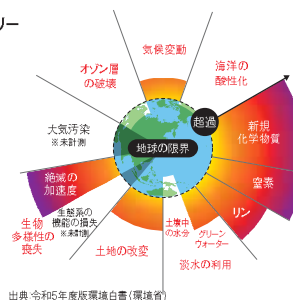
現在、過去に類を見ないスピードで生物多様性が失われています。過去にも自然現象などの影響により大量絶滅が起きていますが、現在は第6の大量絶滅と呼ばれています。人間活動による影響が主な要因で、地球上の種の絶滅のスピードは自然状態の約100〜1,000倍にも達し、世界の生物多様性は過去50年で73%損失したという報告もあります。これにより、たくさんの生きものが危機に瀕しています。

生態系のバランスとキーストーン種

生態系は生きもの同士の複雑な相互作用により成り立っています。アメリカの生態学者であるロバート・トリート・ベイン博士の実験によると、岩場に生息するヒトデを取り除いたところ、ヒトデが捕食していたフジツボが急激に増え、岩場を覆い尽くしました。すると岩場の藻類は育たなくなり、今度は藻類を捕食していた貝類が減少しました。その結果、岩場に生息していた15種の生きものは実験終了時には8種まで減少しました。この実験により、生態系に及ぼす影響が大きく、全体の安定化に欠かせない重要な種である「キーストーン種」の存在が証明されました。先人が守り育んでくれた生物多様性は、一度損なわれると再生するの非常に困難です。生物多様性に配慮して、持続可能な利用を行うことが大変重要です。

プラネタリーバウンダリー

プラネタリーバウンダリーとは、人間が地球上で持続的に生存していくために、超えてはならない9つの要素の限界点を示したもので、いわば、地球の健康診断のようなものです。既に、生物多様性を含む6つの要素は限界値を超えており、ネイチャーポジティブの実現は、地球規模の課題となっています。



生物多様性損失の原因:「4つの危機」 現在、生物多様性は、4つの危機に直面していると言われています。

1 開発などの人間活動による危機



工場の排水



溶けた船のスクリュー

北九州工業地帯の発展に伴い、多量の工場排水が海へ排出されました。これにより、洞海湾では水質の悪化が進み、酸性化により湾を航行する船舶のスクリューが溶け、魚もすめない「死の海」と呼ばれていました。今では、水質も改善し、100種類を超える魚介類の生息が確認されています。

3 人が持ち込むもの、外来種等による危機



オオキンケイギク



アライグマ

人間により外来種が持ち込まれ、それらが野外に放たれ定着することで、従来の生態系が失われてしまいます。北九州市においても、繁殖力の強いオオキンケイギクが確認されています。一方、アライグマについては、生態系だけでなく農作物被害や、生活環境への被害も生じています。また、感染症の危険性もあります。外来生物法では、海外起源の外来種のうち、生態系、人の生命・身体、農林水産業へ被害を及ぼすもの、又は及ぼすおそれがあるものを「特定外来生物」に指定しており、オオキンケイギク、アライグマ等が含まれています。

2 自然に対する働きかけの縮小による危機



放置竹林(小倉南区)

過疎化等により、土地の管理に手が回らなくなり、採草地や雑木林が森林に遷移することで生態系の多様性が失われます。放置竹林は、管理されなくなった竹林が周囲の森林に拡がることにより、森林が持つ「水を蓄える力」や「土砂災害を防ぐ力」を弱らせることはもとより、スギやヒノキの成長を妨げるなど、様々な問題があります。

4 地球環境の変化による危機



磯焼けの様子

気候変動影響による、海水温の上昇などにより、ウニや魚の食害により海藻がなくなる「磯焼け」が問題となっており、北九州市でも磯焼けが認められています。藻場は、魚やイカなどの産卵の場にもなり、海の生態系のためにはとても重要であるとともに、近年は、温室効果ガスの吸収源、いわゆる「ブルーカーボン」としても注目されています。引き続き、藻場の保全等に努め、漁場環境の改善を図り、将来にわたって、持続的な活用ができる里海づくりを推進します。

第2章 生物多様性をめぐる 国内外的動向

「Nature Positive」が世界共通の目標に!

世界の人々で「ネイチャーポジティブ」を目指そう!

2022年にカナダ・モントリオールで開催された、生物多様性条約第15回締約国会議(COP15)において、世界の生物多様性を保全する、2030年までの国際目標を定めた新たな枠組みである、「昆明・モントリオール生物多様性枠組」が採択されました。

この枠組みでは、2030年までのミッションとして、「自然を回復の軌道に乗せるために生物多様性の損失を止め反転させるための緊急の行動をとる」ことが新たに掲げられており、こうした生物多様性の損失を止め、反転させることで自然を回復軌道に乗せる、いわゆる「ネイチャーポジティブ(自然再興)」を目指す動きが、世界的に加速しています。



「昆明・モントリオール生物多様性枠組」採択時の様子
出典 環境省

30by30(サーティ・バイ・サーティ)

30by30とは、2030年までに、陸と海の30%以上を健全な生態系として効果的に保全しようとする目標です。

2030年までのネイチャーポジティブの実現に向けた目標の1つとして、「昆明・モントリオール生物多様性枠組」における、2030年グローバルターゲットに盛り込まれています。

なお、日本では、陸域20.5%と海域13.3%が保護地域として保全されています(2021年時点)。

OECM

OECM^(※)は、国立公園等の保護地域以外で、生物多様性を効果的に保全しうる地域のことをいいます。具体的には里地里山、水源の森、都市の自然等がこれにあたります。

OECMの登録を増やすことで、30by30の達成を目指します。

※OECM: Other Effective area-based Conservation Measures

響灘ビオトープのOECMへの登録

響灘ビオトープは、自然環境学習拠点として機能し、800種もの多様な動植物からなる健全な生態系が存在しています。また、ベッコウトンボやチュウビ等の絶滅危惧種も生息生育しており、生物多様性の価値が高い施設です。

こうした、生物多様性保全上の重要性が認められ、令和6年8月に、響灘ビオトープがOECMに登録されることになりました。

これは、日本において初めての登録(日本からは159箇所が登録)であり、登録時点では、響灘ビオトープは福岡県で唯一のエリアとなっています。



北九州市響灘ビオトープ

日本もみんな「ネイチャーポジティブ」を目指します!

<国家戦略>

このような国際的な動向を踏まえて、日本においても、地球の持続可能性の土台であり、人間の安全保障の根幹である生物多様性・自然資本を守り活用するための戦略である「生物多様性国家戦略2023-2030」が策定され、2023年3月に閣議決定されました。

<国家戦略の主なポイント>

- ・生物多様性損失と気候危機の「2つの危機」への統合的対応、ネイチャーポジティブ実現に向けた社会の根本的変革を強調
- ・30by30目標の達成等の取組により健全な生態系を確保し、自然の恵みを維持回復
- ・自然資本を守り活かす社会経済活動(自然や生態系への配慮や評価が組み込まれ、ネイチャーポジティブの駆動力となる取組)の推進

<法律の制定>

また、2024年4月には、「地域における生物の多様性の増進のための活動の促進等に関する法律(生物多様性増進活動促進法)」が成立・公布されました。

この法律では、企業等による地域における生物多様性の増進のための活動を促進するため、これらの活動に係る計画の認定制度を創設し、認定を受けた活動については、手続のワンストップ化や規制の特例等を受けることができます。

このように、法制度も含め実施環境を整備することを通じて、国を挙げてネイチャーポジティブ実現への機運を高めています。

経済も、「ネイチャーポジティブ」へ!

ネイチャーポジティブの実現に向けては、企業の取組也非常に重要です。2024年3月に国が策定した「ネイチャーポジティブ経済移行戦略」では、ネイチャーポジティブの取組が、企業にとって単なるコストアップではなく、自然資本に根ざした経済の新たな成長につながるチャンスであることが示されています。今後は、こうした取組を通じた、企業価値の向上や、ビジネス機会の創出が期待されるなど、ネイチャーポジティブ経済への移行が強く求められています。

TNFD

TNFD^(※)は、企業が、経済活動に関する自然資本および生物多様性への依存と影響、それに伴う事業機会とリスクの情報開示をする枠組みのことです。これにより、その企業が自然資本や生物多様性に関するリスクをどれだけ抱えているかについて、他の企業や金融機関などが理解・評価することができます。

※TNFD: Taskforce on Nature-related Financial Disclosures

SBTs for Nature

SBTs for Nature^(※)は、企業の経済活動による淡水、海洋、陸上、生物多様性に与える影響を数値化するとともに、悪影響を及ぼす可能性のある要素を削減するための目標を設定する枠組みのことです。

※SBTs for Nature Science Based Targets for Nature

NbS

NbS^(※)は、自然を活用した解決策のことです。

自然が有する機能を持続的に利用し、多様な社会的課題の解決につなげるという考え方を指すものです。

※NbS: Nature-based Solutions

第3章 北九州市のこれまでの取組

豊かな自然に恵まれた北部九州

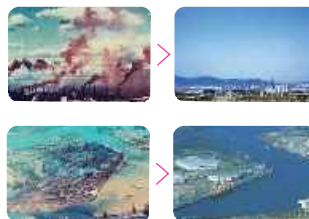
北部九州地域では、自然豊かな山々と海の恵みを受けながら、太古の昔から人々の生活が育まれてきました。縄文時代に、現在の北九州市周辺に形成された湾には、魚介類が豊富に生息し、渡り鳥も多く飛来して、「食料の宝庫」であったとされています。同時に、古くから大陸との玄関口として、日本列島でも比較的早い段階に水稻栽培が始まるなど、そこにみられる自然は古くから人々の営みの影響を大きく受けてきました。

一方で比較的持続可能な自然の利用がなされたため、恵まれた自然環境と相まって、瀬戸内海沿岸などに広くみられた「はげ山」はあまり形成されないなど、近年まで豊かな自然と多様な生物相を維持するとともに、二次的な自然にも多くの生物が適応して人とともに生きてきました。

1960年代～公害の顕在化と克服

よみがえった青い海、青い空

北九州市は古くから九州の交通の要所、石炭の集散地として栄えた街です。1901年に官営八幡製鐵所が創業し、日本の産業発展に大きく貢献しました。しかし、街の急成長は大気汚染や水質汚濁などの深刻な公害を引き起こしました。そのような状況の中、本市では、市民・企業・行政が一丸となって環境改善に取り組み、1980年代後半には激甚な公害を克服し、現在のような青空や海を取り戻しました。



1970年代～企業による大規模な植樹

緑の復活

日本製鉄株式会社では、全国で公害問題が顕在化した高度経済成長時代、1970年代から、製鉄所に環境保全林を整備する「郷土の森づくり」を推進してきました。これは、地域の歴史ある神社の森（鎮守の森）を参考に、その土地本来の植生を調べ、その植生を製鉄所内に再現したことが特徴です。



植林後の様子（八幡）

1980年代～市民の力で生き物が戻ってきた

ホタルやアユの復活

市民・企業・行政が一丸となって公害対策が行われる中で、自然環境に関する市民意識も高まり1970年代後半頃から自然保護・再生活動の広がりが見られました。その代表的な例が、「はたるのふるさとづくり」です。1979年に小瀬野川に放流したゲンジボタルの幼虫が翌年見事に飛翔し、ホタルに対する関心が一挙に高まって、全市に活動の輪が広がりました。

また、1986年には、ボランティア団体である「紫川にアユを呼び戻す会」が設立され、紫川の清掃活動等に加えて、紫川へのアユの放流が開始されました。これにより、今では天然のアユの遡上が見られるようになりました。

同様の活動は、河川の整備、公園・緑地の整備、森林・里山の保全においても見られており、こうした市民の力により、今日の北九州市の豊かな自然は、守り、育まれてきました。



ホタルの幼虫の放流



鮎の放流祭の様子

近年の活動（第二次戦略[2015年度～2024年度]の成果）

基本目標 1

自然とのふれあいを通じた生物多様性の重要性の市民への浸透

- 自然環境にふれあう機会の創出
- 農林水産業の活性化と地産地消を通じたふれあいの促進
- 里地里山の利用と活用



カトガニ産卵観察ツアー

自然環境体感ツアーの参加人数

73人 > **960人**
(2015年) (2023年)
目標:累計500人(2019年)

基本目標 2

地球規模の視野を持って行動できるような高い市民環境力の醸成

- 環境教育・学習の推進、普及啓発
- 自然環境に精通した人材の育成



響灘ビオトープでアクティブラーニング

響灘ビオトープのガイドツアー参加人数

4,548人/年 > **4,244人**
(2015年) (2023年)
目標:4,000人(年間)

基本目標 3

自然環境の適切な保全による、森・里・川・海などがもつ多様な機能の発揮

- 生態系ネットワークの形成
- 地域固有の生態系の保全と利用
- 希少種の保全及び外来種対策



ガシモク観察会

自然環境保全活動参加者数

2,000人/年 > **約3,400人**
(2015年) (2023年)
目標:2,000人(年間)

基本目標 4

人と自然の関係を見直し、自然から多くの恵みを感じることができる状態の維持

- 自然と調和した都市基盤整備の促進
- 事業の実施に伴う環境配慮



勝山公園

環境首都100万本植樹プロジェクトによる植樹本数

657,903本 > **800,700本**
(2015年) (2023年)
目標:累計1,000,000本(2024年)

基本目標 5

自然環境調査を通じて情報を収集、整理、蓄積し、保全対策などでの活用

- 自然環境調査の実施とデータベースの構築
- 市民参加による自然環境情報の収集



ベッコウトンボ調査

ベッコウトンボ市民調査実施回数

3回/年 > **6回**
(2015年) (2023年)
目標:3回(年間)

今後、北九州市が重点的に取り組むべきこと

生物多様性をめぐる国内外の動向や、北九州市のこれまでの取組を踏まえて、今後、北九州市は3つのことに重点的に取り組む必要があります。

1

ネイチャーポジティブの重要性を市民・企業等を知ってもらう

2

ネイチャーポジティブに取り組む市民・企業等を増やす

3

市の豊かな自然を活用して、市の成長へとつなげる

Nature Positive history